ふるさとは遠きにありて・・・
第二回

世界の海をめぐる仕事はすべて長崎で刷り込まれていた

藤原 暢子
text by Fujiwara Nobuko

二〇〇七年十二月、私は英国南部のサウサンプトンという港にいた。タイタニックが出航したことでも知られる港で、今でも多くの英国客船の母港でもある。

チャールズ皇太子に伴われたカミラ夫人が舞台に現れた。後ろには建造されたばかりの客船がライトで照らされている。夫人は水色のスーツとレース帽という姿で壇上に上がり、高らかに言う。

「この船を『クイーン・ヴィクトリア』と名付けます」――その直後、シャンパンのボトルが船の舳先に当たって割れた。

歴代の船がそうだったように、王室関係者による命名で、英国の老舗船会社・キュナード社の新造船がデビューしたのだ。

世界中から集まった二千人の報道陣や客船関係者に見守られ、華やかな命名式が続く。歴史的とも言えるそのシーンに、自分が立ち会えたことに素直に感動し、気持ちは高揚した。

平和公園を訪れる観光バスが、家の前に停まるような観光地で生まれ育った。学校帰りは、観光客と鳩の間をすり抜けて、平和公園を通るのが好きだった。

ただ、なぜあれだけ多くの外国人観光客が長崎の町を歩いていたのかを理解できたのは、仕事で客船（観光船）に乗り始めてから。

船に乗ったのはまったくの偶然だった。「客船に乗って、船上ミステリーを書きたい」という作家を、編集者として、通訳として手伝う名目で、横浜から英国まで四十五日間をかけ、世界を半周したのだ。今から十年ほど前の話だが、客船について何も知らないまま乗り込んでしまう、勢いと若さが（まだまだ）あった。

客船にたちまち魅了されたのは、「乗っている人たち」が理由だった。その船の乗客は、八割が英国人。教師を引退して世界一周をしている人もいれば、伴侶を失ってガールハントのために乗っているギリシャ人のおじさんもいた。交通事故で受けた心の傷を癒すためとか、元漁師でただ船に揺られていたいからとか、それぞれにまったく違う理由で同じ客船に乗り込んでいる。さらには、国にいる家族のため、年間八カ月近く船上で働き続けるクルーたちに話を聞くのもめっぽう楽しかった。

私が通った長崎の中学・高校は、英語教育だけは厳しかった。答えを間違って怒られるのは毎日のことだったし、泣きながら教室を出ていくことも度々だった。そのくせに、先生たちは「英語はただのツールです。仕事は別に専門を持ちなさい」と言い続けた。

当時、その意味はよく分からなかったが、大学を出た後は、雑誌を作る「編集」という職人的な仕事を選んだ。約十年間、幼児雑誌から週刊誌、ファッション誌といろんな雑誌で編集をしてきたが、船に乗ってからは、客船取材の仕事を意識的に増やした。

世界一周はかなり特別なクルーズで、一般的なのは一週間程度のもの。各国の港まで飛行機で行き、一週間のクルーズなら三カ国、四港くらいに立ち寄り、日中に観光する。夜は船内で夕食やショーを楽しみ、皆が眠っている間に船は次の港へ。代金も一週間十～二十万円ほどで、移動、ホテル、食事込みという「手頃な旅行」であることもわかってきた。

取材の依頼があれば、一つ返事で、カメラを担ぎ、知らない国まで飛行機で飛び、船に乗る。気が付くと、編集部に入り、客船の雑誌を専門で作るようになっていた。

それは、長崎の地で私の中に刷り込まれたものがゆっくりと熟成していくようなタイミングだった。一時期、船医をしていた父から聞いて育った世界の海や国々を、今度は私が客船でめぐる。小さい頃から見かけていた外国人に違和感はないし、有り難いことにツールとなる英語も多少たたき込まれている。もちろん今でも、取材や撮影は右往左往。ひるんだり、失敗したり、船酔いすることもある。

実家には年に数回帰る。ただ、前のようにのんびり……とはいかなくなった。何しろ、日本で一番多く外国客船が訪れる港が長崎港だから、ついつい港が気になる。長崎で建造された「サファイア・プリンセス」（プリンセス・クルーズ）が大火災にあい、不死鳥のように蘇った時の、あの安堵感。その後、立派に航海しているのか心配になり、休暇を取って母とオーストラリアまで乗りに行った。

とにかく長崎は、私にとって仕事のネタが尽きない町だし、この仕事に就いた必然性まで感じる。

英国で、カミラ夫人が命名をした「クイーン・ヴィクトリア」は、この三月長崎にやってくる。日本には初寄港で、日本中の客船ファンが大挙して長崎に見物に来ることだろう。

編集費から飛行機代をやりくりし、時差ボケと戦いながら、私がいろんな国に出かけて取材しても、客船は結局、わが町・長崎にやってくる。ちょっとフクザツな気持ちではあるけれど、やはりこの町に生まれたことが、誇らしく感じられるのがこんな瞬間なのだ。

ふじわら のぶこ
海事プレス社『CRUISE』編集長

1970年長崎市生まれ。活水中学校、高等学校を経て、青山学院大学経済学部卒業。医療経営を学ぶため、米国シアトル州に1年間留学。帰国後、医療系の出版社に入社。5年後、フリーランスの編集者となり、様々な雑誌で働く。1998年、英国客船「オリアナ」（P&Oクルーズ）で世界一周したのを皮切りに、現在までに約50隻の客船に乗り、約50カ国をめぐった。5年前より客船の老舗雑誌『CRUISE』の編集部に入り、2008年4月より編集長。インターネットのポータルサイト『All about クルーズの旅』（http://allabout.co.jp/gs/cruise/）ガイドとしても執筆中。
☆隔月刊誌『CRUISE』（海事プレス社）は奇数月の27日発売。ちなみに1月号は長崎特集！